灰狗-ハイイヌ-

星紡 導

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灰狗ーハイイヌー

【Ｎコード】
Ｎ６８７３Ｒ

【作者名】
星紡　導

【あらすじ】
強国【アインベルグ】と、その支配下に置かれている国【ツインバーム】
長く続く戦争の中、兵士であるハイロ・ジンは戦友のシノザキ・レイトと共に戦いを終わらせるべく日夜戦いに明け暮れていた
ある作戦の早朝、敵の基地から逃げ出してきた盲目蒼髪の少女シロを保護したことから二人に重い運命が課せられる
シロとは敵の何なのか、またシロが背負うものとは…

side：ジン？

冷たい戦場の土を踏み、空を見上げた。
眩しい太陽の光にくらくらする。
雲一つ無い青空に舞い上がるのは爆煙
何処までも広がる荒野に響くのは怒号

【ツインバーム独立戦線】

長年、強国に支配されていた母国の戦士たちが奮起し反旗を翻したのだ。
自分もその一人であり、高校を上がるとともに軍に所属した。
成績は自分で言うのもあれだが上中下で表すなら上。射撃の腕も並みよりは有る方だと思う。
そんなことが見込まれ、今は軍の機密等にも少し触れている。回りからは悟られないようにへらりとしているが、アレだ「能ある鷹は〜」…いや、それは違うのか

「…！…っ！」

ふと後ろから声がした
何か焦るような、戦場では日常茶飯事だがどうも自分に向けられているような気がする。

「ジン！伏せろォ！！」

「！！？うわっ」

突然、声とともに服の首の後ろ部分を掴まれ茂みに引きずり込まれた。
―ドッバララ…
直後に響いたのは銃声、それも一人二人ではない集団による撃ち合いだった。
吃驚して自分の居たところを見ると敵軍と自軍がドンパチを始めていた。
あのまま彼処にいれば確実に蜂の巣になっていたということを想像してゾッとする。

「馬鹿かお前！今は戦争の真っ只中で此処は戦場だぞ！？そんな中で突っ立ってるなんて殺して欲しくて来てるも同然だ！！」

頬を引っ叩かれ、その方を向くと同じ隊に所属している戦友のレイトが肩を震わせ怒りを露にしている。
それもその筈、レイトの言うことは正しい
現にレイトが助けてくれなかったら今頃俺は生きていなかっただろう、いや絶対そうだ。

「ああ…レイ、少し考え事してたんだ。不注意だったなー」

「ふざけてんのかテメェ…つーかそのあだ名止めろよ、俺は【シノザキ・レイト】っていう名前があるんだよ」

「レイの方が柔らかくていいじゃんかよ、ただでさえお前は堅いから…ッ」

言った直後に拳骨が降ってきた。それは頭にクリーンヒットし脳が揺れた気がする
なんだコイツ本当に容赦も手加減もない

「次言ったらぶっ飛ばす…まあ、それは置いといて、やるぞ。まだ奴(ヤッコ)さん一杯いるんだからな」

茂みの向こうからはまだ撃ち合いの音が聞こえてくる、覗いてみると敵の軍は戦車を投入してきたようだ。
一気に形勢が逆転され、一人また一人倒れていく。これが、【戦争】

桃瑚は掴んでいた手を離し背中に背負っていた銃を構えた。
それに合わせて頷くと手榴弾のピンを抜いた
先ずはこの軍を退けるのが先にすべきことだ。どんなにどんなに撃退しても相手は無尽蔵のように兵を送り込んでくる。それも途切れることなく
しかし、夜になり自分達の方が疲れを見せ始めるといつも退却していく。それが不思議で仕方がない。
このまま攻め続ければ勝利するのは敵のはずだ。兵士はそんなことを思ってはいけないが、もう誰も予想はついている。
まだ自分達が勝つと思っているのならそれは見栄かただの馬鹿だろう。
どんなに歯向かおうが、敵は数々の国を手中に納める強国で、此方はたかが数年兵を育てただけの国なのだから。

そんなこと敵も知っているだろうが、この戦争が始まって以来ずっとこの状況だ。相手は此方をなぶっているようにしか思えない。
ただ、長々と続く戦争、死人が増え続けるだけで何も変わらない。

「ウワアアァッ…！！」

その声は突然上がった次々と放たれる弾をギリギリ防いで反撃していると奇声をあげながら若い兵士が突っ込んできた

最近は相手の兵の年齢層も若い兵が増えている。

「ッ…！！」

咄嗟に銃の先を相手の腹に打ち付けると悲痛な声が漏れた。
四肢を投げ出した格好で地面に倒れ伏した兵に容赦無く銃を突きつけた
あとは引き金を引くだけで鉛の弾が若い兵の心の臓を貫き命は終わる。
幾度となく奪い奪われる命はいつになれば救われるのだろうか

「正、義…の、為に…ッ」

もう死ぬのだと察した兵はそんな言葉を溢した
顔は歪み、その黒く澱んだ目から涙を浮かべる自分と歳もそんなに違わない若い兵
…何が正義だ。そんな言葉を言う気にもなれなくて体を地に押し付けたまま静かに引き金を引いた

―ドゥンッ

乾いた地面に広がるのは鮮血の赤
この大地は今までどのくらいの血を吸ったのだろう

「…俺の正義は、これなんだ」

他人の命を奪うことで得られる正義

レイトは珍しく何も言わなかった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6873r/

灰狗-ハイイヌ-

2011年10月8日19時19分発行